

例言

一、本書は藤井乙男博士藏古寫本無名草子を底本とした。
 一、本文は底本に忠實に據ることとし、明らかに誤寫と認められるものの外はみだりに私意を加えて改めることをせず、脱字と認められる所にして他傳本により加えた所は一々之を「」の記號で記した。
 而して校訂者の改めたところはその由註記した。
 一、但し一般讀者の便を計つて、本文に濁點を施し、假名を漢字に改めることにした。又底本の假名遣送假名は混亂して一定していないので、今之を正しきに改めた。又底本は章段を分つことなく書き續けられているが、今便宜章を分ち、標目を掲げた。標目は編者の加えたものである。
 一、本書は一方教科書としても使用し得るよう簡單な頭註を附した。

昭和二十五年七月

編者

目次

例言……………二

本文

一 いとぐち……………五

二 月……………一〇

三 文……………二二

四 夢……………二三

五 源……………二三

六 佛……………二四

七 源氏物語……………二六

八 イ、卷々の論……………二六

九 ロ、女の論……………二八

一〇 ハ、男の論……………三三

一一 ニ、ふしぶしの論……………三六

一二 狭衣物語……………三七

一三 夜半のねざめ……………四一

一〇 濱松中納言物語……………四七

一一 玉藻……………五一

一二 とりかへばや……………五一

一三 かくれみの……………五三

一四 今とりかへばや……………五三

一五 心たかき・春宮の宣旨・あさくら・川霧・岩うつ浪……………五五

一六 海人の荊藻……………五七

一七 末葉の露・露のやどり……………五九

一八 みかにはにさける・宇治の河浪……………六〇

一九 こまむかへ・おたへのぬま……………六一

二〇 初雪……………六三

二一 うきなみ・まつらの宮……………六四

二二 今の世の物語……………六五

二三 伊勢物語・大和物語……………六六

二四 八代集……………六八

二五 私撰集・題の歌……………六九

六女	六
七 小野小町	六
八 清少納言	七〇
九 小式部内侍	七一
一〇 和泉式部	七二
一一 宮の宣旨	七三
一二 伊勢の御息所	七五
一三 兵衛内侍	七六
一四 紫式部	七七
一五 定子皇后・上東門院	七八
一六 枇杷殿の皇太后宮	八〇
一七 大齋院	八二
一八 小野皇太后宮	八三
一九 男	八三
附 源氏心くらへ	九
解 題	全

六女 源氏物語の六女
七 小野小町 源氏物語の七女
八 清少納言 源氏物語の八女
九 小式部内侍 源氏物語の九女
一〇 和泉式部 源氏物語の十女
一一 宮の宣旨 源氏物語の十一
一二 伊勢の御息所 源氏物語の十二
一三 兵衛内侍 源氏物語の十三
一四 紫式部 源氏物語の十四
一五 定子皇后・上東門院 源氏物語の十五
一六 枇杷殿の皇太后宮 源氏物語の十六
一七 大齋院 源氏物語の十七
一八 小野皇太后宮 源氏物語の十八
一九 男 源氏物語の十九

一 いとぐち

(一) 涅槃經壽命品に「佛出世難、人身難得、值佛生信、是事亦難」
○形見―底本「かたへ」とある、今改む。

(二) 古今集序に「鏡の影にみゆる雪と波とを歎き」など見える。

(三) 古今集卷十八雜上、詠人不加「世の中はいづこかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿と定むる」。

(四) 法華經譬喻品の句。

(五) 高倉帝御母建春門院の御願寺。承安三年八月建立。京都南禪寺境内にあつたとす。玉養承安三年十月二十一日の條に「廿一日庚辰天晴、此日新御堂供養也。名、最勝光院。建春門院御堂也。云々」又明月記に云、「嘉祿二年有火。最勝光院焼亡。土木之壯麗莊嚴之華美、天下第一之佛閣也。惜而可惜悲而可悲。云々」

八十餘り三歳の春秋いたづらにて過ぎぬる事を思へばいと悲しく、たま／＼人と生れたる思出に、後世の形見にすばかりのことなくてやみなむ悲しさに、髪を剃り衣を染めて、僅に姿ばかりは道に入りぬれど、心はたゞそのかみに變ることなし。歲月の積りに添へていよいよ昔は忘れがたく、ふりにし人は戀しきまゝに人知れぬ忍び音のみ泣かれて、苔の袂も乾く世なき慰めには花籠と臂に掛けて、朝毎に露を拂ひつゝ、野邊の草むらに交りて花を摘みつゝ、佛にたてまつるわざをのみして、數多年経ぬれば、いよ／＼頭の雪積り、面の波も疊みて、いとゞ見まうくなりゆく鏡の影も、我ながらうとましければ、人に見えむこともいとゞつゝましけれど、道のまゝに花を摘みつゝ、東山わたりをとかくかゝづらひ歩く程に、やう／＼日も暮方になり、たち歸るべきすみかも遙けければ、いづくにても行きとまらむところに寄り臥しなむと思ひて、「三界無安猶如火宅」に口誦みて歩み行く程に、最勝光院の大門あきたり。

(一) 狭衣大将が粉河詣をする。十一月の半頃、太山嵐の吹き荒ぶ中で、狭衣が法華経を誦すと普賢の尊体がありありと現れたこと。(卷二の下)

(二) 東宮が即位になり、源氏の宮が女御代から引き続いて、入内になる。その噂の専ら折、堀河大臣が夢に賀茂から禰宜らしい人が来て、禰にさした文を源氏の宮に、あるのを開けて見ると、「神代より外に誰か折るべきよし、試み給へ。さてはいと便なからむ」と書かれたのを見た事。

(三) けんそう(顯證)であらう。

(四) 齋院の御神殿鳴りたる事。の意であらう。齋院を狭衣の訪ねた際神殿の鳴ったことが卷三の下に見える。それを指すか。

(五) 卷四の下に見える。狭衣大将が天照大神の御識して、出家の本意も遂げずに帝位についた事。

(六) 法華経序品に「普佛世界六種震動」とある。天地が震動する震、撃、吼、爆の六種に震動すること。六種震動という。ただしこの話は流布の狭衣本文には見えない。卷三の下、狭衣大将が齋院を訪ねて、琵琶が弾くときのことをいふか。

(七) 源氏物語の源氏の君のこと。

(八) 狭衣大将は帝の御子ではなし。父堀河大臣は一條院当帝など。一つ后腹などの二の御子。母后は打ち続いて帝の御筋ではあるが、ただ人として莊を賜はった人の子であるから、帝位につくのは浅ましい上天皇となられ、堀河院と申した由見える。(九) 無名草子の著者は狭衣の作者を女性と考へていつてゐる。(一〇) 卷四の下に狭衣が帝位につくと、父大臣は太

粉河にて普賢の現れ給へる。源氏の宮の御もと「へ」賀茂大明神の御懸想文遣したる事。夢はさのみこそといふなるに、餘りにけんうなり。齋院の御かうどのなりたる事。何事よりも、大将の帝になられたる事。返す返す見苦しく浅ましき事なり。めでたき才。才覺優れたる人世にあれど、大地六反震動する事はあるべき。いと恐しくまことしからぬ事どもなり。源氏の院になりたるに、さらでもありぬべき事ぞかし。されどもそれは正しきみこにておはする上に、冷泉院の位の御時、我が御身の有様を聞きあらはして、ところおき奉り給ふにてあれば、さまでの咎にはあるべきにもあらず。太上天皇に擬ふ御位は、たゞ人も賜はる例もあるを、これは今少しくづしてまねびなされたる程に、いと見苦しきなり。さりとて帝の御子にてもなし。孫王にて父大臣の世より姓賜はりたる人のいと浅ましき事なり。なにのいたりなき女のしわざといひながら、むげに心劣りこそし侍れ。大臣さへ院になりて堀河院と申すかとよな。物語といふものいづれもまことしからずといふなかに、これはことの外なる事どもにこそあんめれ。

九、夜半のねざめ

(一) この物語が始めから、女主人公ねざめの上(中)君一人の事を書き続ける形で始められてゐるのをいふ。

(二) 脱文があるらしい。ここは「中納言の忽ちあらずと見なし」などの意であらう。卷一に「中納言が法性寺僧都の下で一夜逢つた中納言(源中納言の娘)を、僧都の姫新少將と思ひ誤り、その姪を我にもこの姫の女性が自分の思ふ外とは別人であつたのを見出した時をいふのであらう。

(三) 中納言がせめてはこの新少將から「かの一夜の女のことを聞き出さうと願つて得た答。物語は第五句「ありつる」とあり。又風葉集、拾遺百番歌合には「落はたれ」とある。

(四) 中の君と中納言との恋のいきさつをいふ。

(五) 卷二に見える。中納言との恋が失つた中の方(姉君)に知れて立場を失つた中納言が、九月父の隠時、悲しむ歌にひそかに運れる。(六) 広沢にかくれた中の君を聲を聞かして訪れた中納言(当時大納言)が遂に逢へず空しく帰るのを、女房の少將が見て、気の毒がり慰めようとして詠んだ歌。第四句「底本は「思ひするべき」とある。今改む。

九夜半のねざめ

寢覺こそ取り立てていみじき節もなく、又さしてめでたしといふべき所なけれども、初めよりたゞ人ひとり「の」ことにて、ちる心もなく、しめく」とあはれに心入りて作り出でけん程思ひやられて、あはれにありがたきものにて侍れ。いづくか少し胸のひまあり、心づくしなるといふなかに、身にしみて覺ゆるふしは、忽ちにあらずと見なしたる、心騒ぎたる浅ましきに、
 漕ぎ返りおなじ湊による舟のなぎさをそれと知らずやありけむ
 といひ出でたるを聞きつけ給へる心のうち。又ことどもあらはれて、中のうへ廣澤へおはする程、
 立ちもぬも羽をならべし羣鳥のかゝる別れを思ひかけきや
 などある折。雪の夜廣澤におはして、空しくたち歸り給ふを、心苦しく見佐びて、少將、
 めぐり逢はむ折をも待たず限りと思ひはつべき冬の夜の月
 と慰め聞ゆれば、